



## 幼 児 死 亡

齋 藤 文 雄

一九五五年、つまり昭和三〇年の衛生統計の中の母子関係の数字が、本年一月ようやく印刷になって出た。その中で他の年令層は省略して、本誌と関係のある年令層の子どもについて感じたことを書いてみたい。この年令層の統計は一九五四年が最近の数字であって、一九五五年度はまだ発表されていない。したがってここでは一九五四年の数字を示す。

その詳細は次の表に示すような数字であるが、少々過去にさかのぼって一九五四年の数字と比較してみることにする。

まず全死因死亡幼児実数とその率をみると（一歳児というのは、満一年以上から満二年に達するまでの年令層であり以下これに準ずる）年次毎に幼児死亡は減少している。しかしこの実数は出生数と関係があるのでこの数字だけで安心するわけにはいかない。どうしても、その年の幼児数全体との割合を見ていく必要がある。それが率として現わした数字であ

るが、この数字を見ても漸減しているから、この年度内ではわが国の幼児の死亡は年々減少しつつありということができるといえる。それだけ育て方が上手になったというか、健康者がふえたというか、とにかく良い傾向であることは間違いない。

さて、それでは幼児がどんな病気でどれくらい死亡するのか、それが表に出ている病名である。これ以外に原因が数多くあるが、ここでは多いものを十種類掲げ、他はその他の全死因として片づけてある。その原因となる病気は年次的に多少の変動が認められるようであるが、どの年を見ても、幼児死亡の第一の原因となっている病気は、胃炎、十二指腸炎、腸炎、大腸炎という消化器系統の病気である。その次はとうとうと一九五一、五二、五三のいずれの年も赤痢が頭張っている。これは一九五四年になって第三位の原因におちているが、とにかく赤痢も伝染する消化器系統の病気である。そう

1~4歳児主要死因別死亡数及び率

死 因	年 次				率 (各年令階級人口1万対)			
	1951	1952	1953	1954	1951	1952	1953	1954
全死	79,630	59,434	50,516	41,238	83.3	64.0	57.7	50.9
胃腸炎・十二指腸炎	17,107	11,794	9,142	7,448	17.9	12.7	10.4	9.2
肺炎	7,362	7,114	6,493	6,209	7.7	7.7	7.4	7.7
赤痢	11,394	9,152	7,429	6,052	11.9	9.9	8.5	7.5
麻疹	10,062	7,389	6,814	5,430	10.5	8.0	7.8	6.8
全結核	5,057	1,728	3,076	1,797	5.3	1.9	3.5	2.2
腎炎及び膀胱炎	5,112	3,482	2,521	1,784	5.3	3.7	2.9	2.2
肺炎(細菌性を除く)	1,723	1,745	1,026	930	1.8	1.9	1.2	1.1
百日咳	1,802	1,358	1,115	850	1.9	1.4	1.3	1.0
気管支炎	1,791	965	529	675	1.9	1.0	0.6	0.8
その他	1,858	1,193	325	657	1.9	1.3	0.4	0.8
その他	16,362	13,514	12,046	9,406	14.6	13.8	13.4	11.6

すると、伝染するしないはとにかく、わが国の幼児は年々消化器系統の病気で夥しく死亡しているというところになるが、考えさせられる事実である。というのはアメリカその他の国々ではこの事実は全然認められない。消化器系統の病気が幼児死亡の第一原因となっているのは先進国の医学統計からいったらひとつの驚きではない。誠に珍ら

しい日本の数字である。いかに幼児期の食生活がでたらめか、不潔と結びついているか、結果はかくも多数の犠牲者となって現われているのである。

これは子どもに責任はない。鯨は指でつまんでたべるものというような大人の食生活の不潔を子どもにそのまま実行させるところに本当の原因があるので、大人の反省の下に改善されなければならぬ。一方日本の都会という都会で下水道の完備している都会があるだろうか。世界の三大都市などとはばったいことをいっている東京でさえ、白昼糞便処理の車が横行している現在であるが、これがなくならない限り根本的な赤痢対策はなりたたないであろう。口角泡をとばして文化を論ずる人たちがさて家へ帰ればくみとり便所にかがまなければならぬとしたら、われわれの立場からいったら何の文化ぞやといいたくなる。赤痢菌は口からしか幼児の身体に侵入しない菌であることを反省すべきである。

次に不慮の事故の項をごらんいただきたい。一九五四年には赤痢が第三位におちたので不慮の事故は第二位となった。しかし率のところでごらんの通り一九五一年から五四年までの数字は横這いで少しも減少しない状態である。消化器系統の病気のように改善のあとがみられない。アメリカなどは

各年齢層を通じて幼児期死亡の第一位はアクシデントであるが、どうやら日本でもそれに近い数字を示している。いったいどういふ内容をもった事故なのか。表を省略するが、溺死、溺水が断然多い。夏という季節が最も関係深い。とにかく一九五四年には四歳までの子どもが三七三四人、これだけで生命を失っている。それに次いで多いのが自動車による不慮の事故である。八六六人がこの年に死亡している。

次いで火傷である。わが国では熱湯や蒸気のやけども火のやけども同じやけどという字しかない。火によるやけどで四四三人、熱湯や化学薬品などのやけどで三七三人が死んでいる。死なないまでも、やけどをしたという子を入れたらたいへんな数になるであろう。

この数字は日本にはない。その考えを想定できると思われるひとつの例をニュージーランドの衛生統計からひろってみると次の表のような数字である。いづれにしても不慮の事故は今後交通事故によって大部分が代表されるような時代が来ないとも限らない。あまりにも日本の歩行者はみじめであるし、幼児期の遊び場にも事欠く現在は怖ろしい。その他窒息、墜落事故、電車鉄道事故、自動車以外の通路交通機関による事故等々がつづいているが、今後の対策としては真剣な考慮が必要である。警視庁だけの問題ではないようである。

1954年五歳以下の幼児の不慮の事故(%)を治療した病院(ニュージーランド)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	平均
創傷	5.5	15.9	20.4	27.1	26.8	20.9
火傷	42.8	33.4	17.8	11.1	7.9	20.2
骨折	13.9	8.7	17.8	23.9	34.3	19.6
中毒	6.9	24.8	19.5	9.1	7.1	14.9
頭部異状	10.9	5.9	9.7	11.5	12.2	9.6
その他	7.5	6.5	8.1	9.3	6.1	7.5

などないはずである。

次に位するのは麻疹である。ご承知のことと考えるが麻疹という病気は幼少時にかかるほど死亡率は高い病気である。つまり小さいときほど重病であり生命の危険が大きい。その

第四位は肺炎である。さすがに乳児期ほど多くはないが、それでも生命を奪うという点では油断のならない病気である。抗生物質やスルファミン剤の出現で死亡は年々減少して来たことは確かであるが、一方これらの薬剤に対する耐性菌、すなわち慣れっこになってしまつてこんな薬に平気になった菌もふえて来ているから、減少度もはなはだゆっくりしている。肺炎は感冒から発展するが、その根本には抵抗力のない身体という問題がある。ふだんの適正栄養、保健生活によって鍛えられた子どもなら肺炎で死亡することは殆

点からいって幼児期の子どもが麻疹で死亡するというのは、よほどの場合と考えなければならぬ。現に、この四年間に五・三から二・二と半分以下の割合になってしまっているが、これは治療法と看護法が徹底して来たことを意味すると見てよからう。麻疹という軽い病気のように考えられた時代もあったが、その考えが是正されて来た結果死亡が減少したといつてよからう。今年はかなり大きな流行を見たが、決して軽視してはならない病気である。

次にあらゆる場所の結核をまとめて全結核というのがそれが六位である。十歳以後になると結核は死亡原因の第一位となるのであるが、すでに幼児期に頭をもちあげ始めていることが判る。結核も伝染病である。国の法律では乳児期からB・C・Gによる予防法が規定されているけれども完全に行われていない。幼児期は年一回のツベルクリン反応では困る。少なくとも年二回は行って、対策を怠らぬ注意が必要である。この点では筆者は小学校でも同様と考えるものであるが、幼稚園などの健康管理もその点に沿うべきであると考える。

与えられた枚数も残り少なくなった。ここらで結論にはいることにしたい。

以上は病気にかかった子どもの統計ではない。病気にかか

って不幸死の転帰をとらなければならなかった子どもの問題である。責任の大半は家庭の育て方にあるといえないこともないが、幼児の生活はもう家庭だけにはない。幼稚園児ともなればすでに集団生活が始まっているわけであり、子どもの罹病という点では幼稚園も保育所もその責任を免れるわけにはいかないのである。

従来とてもその点では多くの考慮が払われていることは確かであるが、果して他の保育技術、保育施設と平行してどれだけ進歩しているだろう。単に「私のところは園医がおります」というだけで体裁ばかりのいわゆる表向きが未だそこら中にみられる。本当に立派な幼児教育を考えるならこんなことはあり得ない。この方面だけに進歩がない幼児教育は根本的な出直しが必要であると考える。

(筆者は聖ロカ病院小児科医長)

\* \* \*